

ひとはく通信

# ハーモニー

108

Feb. 2020

特集 自然環境や生きものに関する  
小さな子どもへの学びの支援



## 一 種の基準となるタイプ標本 一

現在、学名のついている生物種（既知種と言います）は、世界中に124万種もいます。このうち動物は95万種、植物は22万種、その他は菌類などです。そしてそれぞれの既知種には、その種の基準となる「タイプ標本」が指定されています。タイプ標本は普通、1種につき1～数個体が指定されるため、その数は膨大になります。このタイプ標本は分類学においてとても重要で、もし紛失・破損してしまったり、その種の定義が曖昧になってしまう恐れがあります。このため、世界中の博物館などが協力して、膨大な数のタイプ標本を大切に保管しています。人と自然の博物館にも、植物とコケ類は130点ほど、昆虫は1200点以上ものタイプ標本が収められています。

一方、ある研究によると、地球上には875万

種もの生物が生息すると推定されています。既知種（124万種）がこの14%に過ぎないことを考えると、まだまだ多くの種に学名が付いておらず、タイプ標本も指定されていないことが分かります。このため、今後も新種が発表され続け、それに伴ってタイプ標本も現在の何倍にも増えることが予想されます。博物館の役割も、ますます重要になってきますね。

高橋 鉄美（自然・環境マネジメント研究部）



写真1  
タイプ標本は、標本庫中の金庫で厳重に保管されています。



写真2  
常木コレクション（ハチ類）には、377種、545点のタイプ標本が含まれます。

## トピックス

## ひとはく活用術

### 学習指導要領改訂と博学連携 ～「探究的な学習」への博物館の活用～

今春から「博学連携（博物館と学校との連携・協力）」の根拠である学習指導要領が順次改訂されます。総則において「資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実するために博物館等を活用する」という文言が追加されました。これは、「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、社会教育施設の積極的な活用を促すものと考えられますが、博物館の活用は情報収集にとどまりません。実物に触れることで揺さぶられた感性や問題意識をきっかけに、探究の過程を通して幼児や児童生徒の資質・能力を育成する、いわゆる「探究的な学習」

に活用することが期待されています。

博物館には膨大な数の標本が収蔵されていますが、展示物はその一部にすぎません。ひとはくでは「探究的な学習」のお役に立てるよう、展示空間の整備に加え、幼児や児童生徒の実態や学校のカリキュラムに応じた特注セミナーを積極的に展開しています。講義はもちろん、本物に触れたり直接体験したりする特注セミナーも多数用意しています。学校や園での「探究的な学習」にも、ひとはくをぜひ活用ください。

小山 恵介（生涯学習課長）



写真1  
虫とりペナントレース



写真2  
身のまわりに潜む小さな化石



写真3  
コウノトリを支える生態系のしくみ